

モンシロチョウやアゲハチョウについて多くの方がよく目にしているキチョウを紹介する。このキチョウは東北を北限として八重山諸島まで広く分布しているが、1992年に八重山地方のキチョウとは種として区別できる違いのあることがわかって、八重山産の和名をキチョウ（別名ミナミキチョウ）、それより北に分布するキチョウはキタキチョウに変更された。このキタキチョウについては、ごく普通種でありながら、まだまだ解明できていないことが残る、実に興味深い

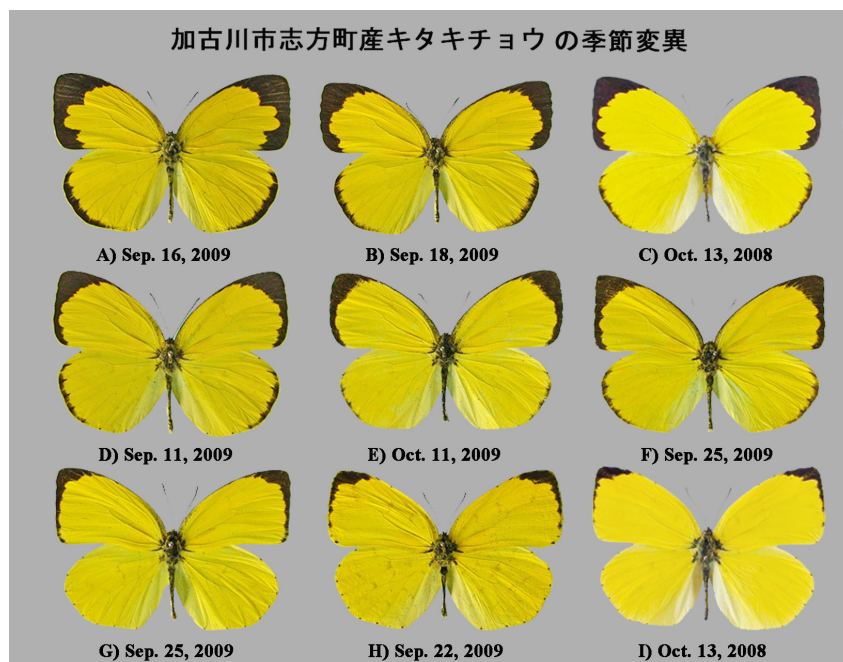
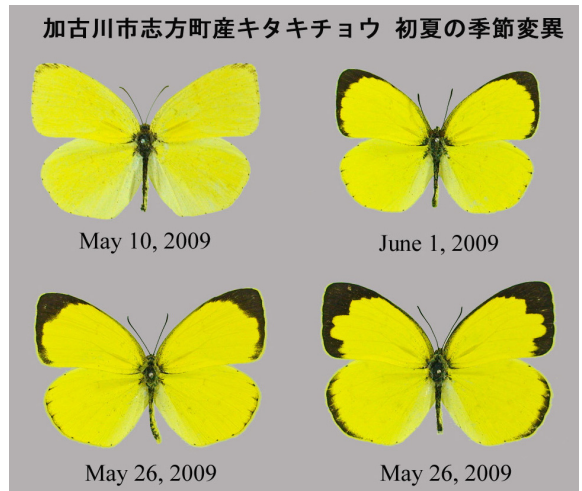


チョウである。例えば、東北地方では青森県でも発見されるが、青森県下で定常的に発生している確証はなく、もっと南の地域で発生して迷い込んだ迷チョウ（その地域では発生していないチョウがたまたま迷い込む場合の呼び方）か、♀の迷チョウが生んだ卵からの一時的な発生だと考えられ、真相は

解明されていない。キタキチョウは、春型、春夏中間型（稀）、夏型、夏秋中間型、秋型、晩秋型と、最も多くの季節変異を示す。

春から夏への移行タイプ：春夏中間型は2009年に注力して標本を追加した。5月10日の黒鱗粉が見られない個体は、Apr. 5, 2008の標本を晩秋型としているのと同じで、このキタキチョウは晩秋に発生した個体がチョウのままで越冬して、暖くなった春先から再び活動を始めた結果である。2018年4月13日にはカラスノエンドウで吸蜜する越冬個体の記録をとっている。

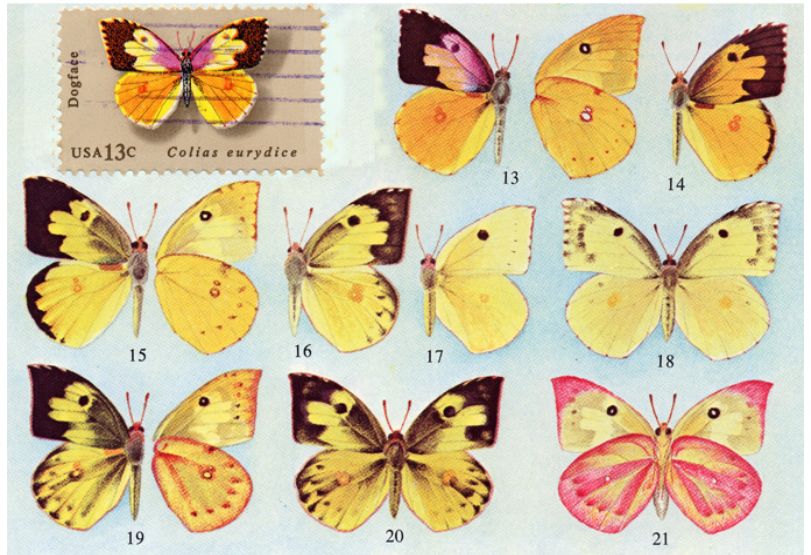
次に2008-9年に初秋からの季節変異型にこだわって作製した実際の標本写真を示す。翅表の黒い鱗粉がだんだん薄くなっていく変化が明らかで、まさに、百聞は一見にしかず。初秋型（G）から秋



型（I）まで前翅の黒鱗粉が少しずつ小さくなっている。実は、このキチョウの季節変異については、中学時代の恩師である理科担当の先生から「チョウの標本をただ並べるだけでは研究



とはいえない。ごく普通種のキチョウに関してわかっていないことがいっぱいある。そういう視点でチョウたちと接しなさい」と諭されたことがあり、その後、チョウの生態研究が筆者のライフワークとなっている。写真に示した標本記録中で興味深いのは、2008年10月13日、加古川市志方町の同一場所・同時刻に、準夏型(C)、夏秋中間型(右図)、そして秋型(I)が混在していたこと。翅表の黒い鱗粉の発達度は、幼虫時代の日照時間、気温などの



影響が大きいと考えられるが、全く同じ地域で同じ時期に育ったはずのチョウが3種類の季節型として発生している事実は、なんと説明していいのかわからない。なお、あえて準夏型だと区別したのは Sep.9,2008 の夏型と比べれば前翅黒鱗粉の発達度に明確な差があることで納得していただけはらず。この夏型前翅の黄色部分に注目すると、ある種の犬の横顔に似ている。アメリカには目玉模様まである Dog face と呼ばれるモンキチョウの仲間がいて切手にもなっている。越冬後の母チョウが産卵をして育った第一化発生個体が5月頃からみられ、その中に春夏中間型が混在する。キタキチョウはハギ類、ネムノキ、クサネム、ニセアカシアなどの葉っぱや花を食エサとして育つ。高砂市松波町周辺では、主にヌスビトハギで発生している。2008年、志方町の水田横に自生しているクサネムで産卵場面に出くわし、持ち帰って飼育した際の羽化直前の蛹と羽化後のキタキチョウの写真を示す。2009年3月、西畑にあった花畑では暖かくなってもなかなかチョウが飛ばなかったが、3月18日、越冬後のキタキチョウが目覚まして遊んでいた。



### Oct. 12, 2012 田園地帯秋のチョウ

チョウが交尾をしている姿を観察できる機会はきわめて少なく、まさに偶然出会えるという光景であるが、本種については2012年10月と2017年7月に撮影記録が撮れている。

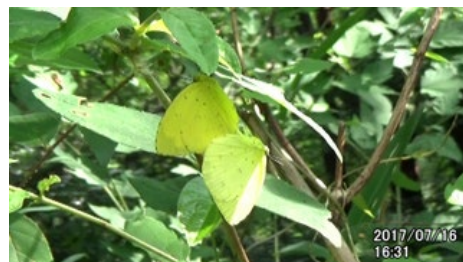
秋晴れの午前中、久しぶりに黄金の稲穂が揺れる田園地帯を自転車で巡り、まずはクサネムが繁茂する路傍の休耕田にキタキチョウが群れ飛ぶ光景をみる。あぜ道を伝って歩を進めると、ク



サネムの茎に静止する交尾中の新鮮ペアが見つかる。すぐ上方には蛹の抜け殻があって、おそらく羽化したばかりの♀に探雌中の♂がすばやくアタックしたものと思われる。このペアの撮影を終えて全体を見渡すと、さらに別の2ペアが目に入る。単独で飛び回る個体をネットインして調べると、前翅外縁黒紋が幅狭くなった夏型終盤型と、前翅端だけに黒鱗粉が残る秋型が混じっている。

July 16, 2017 クロシジミ（絶滅危惧 I A 類）の生息地で

30度を超す炎天下、途中から1kmを徒歩で巡り、最後の山頂部でようやくクロシジミをみる。オオムラサキの登場でKさん親子が色めく傍らで、初めてクロシジミの交尾個体が観察できる。下山途上でもダイミョウセセリが多く見られ、ホソバセセリがウツボグサやアザミなどで吸蜜をするのをあちこちで観察。最後にはクロシジミに次いでキタキチョウの交尾個体が木陰で愛を育んでいた。



Mar. 22, 2020 高砂公園 Ser. 6

テニスを終えてムラサキシジミを探してみるが今日も姿はみられず、昨日ウラギンシジミを見た同じ場所でキタキチョウが飛ぶ。ウバメガシの垣根のどこかにとまりそうな飛翔をくりかえすのでじっと待つと、やがて止まってくれるが翅を開いてはくれない。そこにモンシロチョウがやってきて絡みの卍飛翔が始まるがビデオ撮影はままならないまましばらくその様子をながめる。両者がはなれたあと、キタキチョウはホトケノザなどが咲く陽だまりへと飛んでいくのでついていくと、黄色い花で蜜を吸い始めている。先日はホトケノザで吸蜜している個体がいて近づくと



すぐに飛ばれたため、遠目の位置からビデオ ON として近づくと、今回はじっくりと蜜を楽しんでいる様子。少しずつ接近してストローの動きまでしっかり撮影記録を取る。最後に飛び立ってしまうが、その直前の記録として前翅に性標がない♀だとわかる映像がとれている。この黄色い花について手元の簡易植物図鑑で調べるとノゲシのようだ。